暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

～第二三二号～

立秋　八月七日

伊勢の晦日（みそか）

毎月の月末である〝みそか〟に開かれている寄席（よせ）「みそか寄席」。平成三年六月から始まり、早二十五年、今年五月にはめでたく三百回を超えました。その記念特別公演が八月十一日に伊勢市観光文化会館で開かれます。特別ゲストに落語会で唯一の人間国宝である柳家小三治さんを迎え、おなじみの桂文我さん、桂まん我さんが出演します。

伊勢では毎月一日、伊勢神宮にお参りする「朔日（ついたち）参り」の習慣があります。そして、月末の夕方には、翌月の祭典に奉仕する神宮の神職らのお祓いを行う「大祓（おおはらい）」が内宮の斎館（さいかん）前の祓所で執り行われます。

晦日と書いて、「みそか」。もともとは三十番目の日という意味でしたが、旧暦の頃、小の月が二十九日、大の月が三十日であったため、それが太陽暦に移行した明治以降も、三十一日の月でも三十日ではなく、三十一日が「みそか」になりました。また、晦日は音読みで「かいじつ」、月隠れが音変化した「つごもり」とも読みます。特に「つごもり」は、月が隠れる頃を言い表した言葉です。俗謡に「女郎の誠、玉子の四角、あれば晦日に月が出る」とあるように、ありえないことのたとえとして晦日の月といわれたのです。

また、月末は金銭を支払う「晦日の支払い」、月の末を祝って食べる「晦日そば」という言葉があり、ひと月の大きな節目であることがわかります。伊勢ではそんな月末の夜に大いに笑ってもらおうという趣向の寄席が、四半世紀という長きにわたって続いているのです。これも「みそか」に行っていることが大きいのでしょう。伊勢の晦日夜は大いに笑って、新たな月を迎えたいものです。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁